

御命日章(三帖第九通)

そもそも、今日^{こんにち}は鸞^{らん}聖^{しょう}人^{にん}の御命日^{ごめいにち}として、かならず報^{ほう}恩^{おん}謝^{しゃ}徳^{とく}
のころざしを、はこばざる人^{ひと}これすくなし、しかれどもかの諸^{しよ}人^{にん}の
うえにおいて、あいころうべきおもむきは、もし本願^{ほんがん}他^た力^{りき}の。
眞^{しん}実^{じつ}信^{しん}心^{しん}を獲^{くわく}得^{とく}せざらん未^み安^{あん}心^{しん}の輩^{ともがら}は、今日^{こんにち}にかぎりて、あ
ながちに仕^し出^{しゅつ}をいたし、この講^{こう}中^{ちゆう}の座^ざ敷^{しき}をふさぐをもつて、眞^{しん}宗^{しゆう}の
肝^{かん}要^{によう}とばかりおもわん人^{ひと}は、いかでかわが聖^{しょう}人^{にん}の御意^{ごい}にはあいな
いがたし、しかうといえどもわが在^{ざい}所^{しよ}にありて、報^{ほう}謝^{しゃ}のいとなみをも
はこばざらんひとは、不^ふ請^{しゆう}にも出^{しゅつ}仕^しをいたしてもよろしかるべきか、
されば、毎^{まい}月^{がつ}二^に十^{じゅう}八^{はち}日^{にち}ごとにかならず出^{しゅつ}仕^しをいたさんとおも
わん輩^{ともがら}においては、あいかまえて日^ひごころの信^{しん}心^{しん}のとおり、決^{けつ}定^{てい}せざ

らん未安心みあんじんのひとも、すみやかに本願ほんがん真實しんじつの他力たうりき信心しんじんをとって。

わが身の今度こんどの報土ほうど往生おうじょうを決定けつじょうせしめんこそ、まことに

聖人しょうにん報恩ほうおん謝德しゃとくの懇志こんしにあいかなうべけれ、また、自身じしんの

極樂ごくらく往生おうじょうの一途いちずも・治定ぢぢじょうしおわりぬべき道理だうりなり、これすなわ

ちまことに、自信じしん教人きょうにん信・難中なんちゅう更難てんきょう、大悲だいひ伝普てんぷ化

真成しんじょう報恩ほうおんといふ。報文ほうぶんのころにも符合ふごうせるものなり、それ、

聖人しょうにん御入滅ごにゅうめつはすでに、一百いっぴやく余歳よさいを経ふといえども、かたじけなくも

目前もくぜんにおいて、真影しんねいを拝はいしたてまつる、また、德音とくいんははるかに

無常むじょうの風かぜにへだつといえども、まのあたり実語じつごを相承そうじょう血脉けつみやくして、あ

きらかに耳みみの底そこにのこして、一流いちりゅうの他力たうりき真實しんじつの信心しんじん・いまにたえ

せざるものなり、これによりていまこの時節じせつにいたりて、本願ほんがん真實しんじつの

信心しんじんを獲得きやくとくせしむる人ひとなくは、まことに宿善しゆくぜんのもよおしに、あず

からぬ身とおもうべし、もし宿善開発の機にてもわれらなくは。

むなしく今度の往生は不定なるべきこと、なげきてもなおかなし

むべきは、ただこの一事なり、しかるにいま本願の一道にあいがた

くして、まれに無上の本願にあうことを得たり、まことによるこび

のなかのよろこび、なにごとかこれにしかん、とうとむべし信ずべし、こ

れによりて、年月日ごろ、わがここらのわらき迷心をひるがえして、

たちまちに、本願一実の他力信心にもとづかんひとは、眞実に

聖人の御意にあいかなうべし、これしかしながら、今日聖人の、

報恩謝徳の御ころざしにも、あいそなわりつべきものなり、

あなかしこ　あなかしこ

(不読)

文明七年五月二十八日これを書く

御命日章の大意

今日は親鸞聖人のご命日ですから、参集の人々で、報恩の気持ちを持たない人は少ないでしょう。しかし眞実信心を得ていないものが、ただ今日だけ参詣すればいいと思っているのなら、聖人のお心には浴いません。けれども家において報恩のおつとめもしない人は、いやいやながらも参詣するのもよいでしょう。毎月二十八日にかかわらず参詣しようと思っている人は、しっかりと心構えをし、信心をまだ決定していない人は、このたびの参詣ではやく他力の信心を決定して、浄土往生を定めるようにしてください。そのようにしてこそ、報恩の気持ちにかなひ、また自らの浄土往生も定まるというものです。このことは善導大師の「自信教人信

難中転更難　大悲伝普化　真成報仏恩」というお言葉にも
合うものです。

聖人が入滅なさって百余年を経過しますが、今、目の前にご
真影を拝することができ、またお声を直に聞くことはできません
が、み教えはそのまま伝えられて、他力の信心は今も絶えること
はありません。このときに他力の信心を得なかったなら、自分は、
如来のお育てのご縁が実を結ばなかったと思わなければなりません。
それは嘆いてもあまりあることです。

ところが、いま私たちは、本願の教えに遇いがたくして遇うことが
できました。これにすぎる喜びはありません。まことに如来の本願
を尊び、疑いなく信じるべきです。このことにより、自力の心をひる
がえして他力の信心をいただく人は、まことに聖人のお心にな

う人です。これこそ、聖人に対する報恩謝徳のところがそなわった
ということです。